



チラシの思い出 福島敦子

子供の頃、自由な夢を描くキャンパスは、いつもチラシの裏だった。週末になると宅配の新聞の間に折り込み広告のチラシが沢山入ってきた。当時は表面のみ広告が印刷され、裏面は白紙のままのものが多かった。同じ紙でもノートや画用紙はあらたまった感じがして、書く内容は勉強の延長線上という意識があったが、チラシは書き損じても丸めて捨てればいい。手軽で思いつくままに鉛筆と戯れることのできる空間だった。大好きなマンガの主人公が踊り、弟や妹の似顔絵は親に好評で、一家団欒に貢献した。難しい漢字の練習用紙やテレビから流れる応募要項のメモ用紙としても重宝した。

名古屋の放送局に就職した頃、テレビやラジオで読むニュース原稿の文字は、記者やデスクの手書きだった。これが曲者で、アナウンサー泣かせだった。性格が豪快な人は文字も筆圧も大きい傾向にあり、白い原稿用紙があつという間に黒く染まっていくよつだった。それで違筆ならば問題ないのだが、個性的な文字にはとても苦労する。行間に自分で補足の書き込みをしたのだが、失礼にあたると思い、そのままにして結果的にオンエアーで、声が詰まる失態を演じてしまったことがあった。

取材で苦労を重ねた特ダネ原稿は、文字の二つ二つに記者の気合、魂が込められているよつで、こちらも身の引き締まる思いでマイクに向かった。そしてそのニュースの反響が大きかったときは、取材した記者と一緒に気持ちになつて感激したことを覚えている。一枚の原稿用紙の影響力の大きさを実感した。

IT時代の到来で、ペーパーレスが言われて久しい。いまや新聞の折り込みチラシは裏面にもびっしりと商品の写真が並び、マンガを描くことはあるが、電話のメモを取る余白すらほとんどない。子

福島敦子(ふくしま・あつこ) キャスター、エッセイスト。津田塾大学学芸学部卒。中部日本放送を経て、1988年に独立し、NHK、TBS、テレビ東京などで活躍。メディアを通じ、企業経営者の取材に精力的に取り組んでいる。著書に『それでもあきらめない経営』『ききわけの悪い経営者が成功する』など。



供たちの自由な発想を展開する媒体は、紙の上からパソコン画面上へと、どんどん広がっている。メディアの記者やディレクターは原稿用紙ではなく、パソコンのディスプレイに向かってキーをたたき毎日だ。ニュース原稿や番組台本はすべてプリントアウトされたパソコン文字になり、判読不能な個性的な文字は消滅したよつだ。アナウンサーやキャスターの原稿の読み違いは格段に減ったことだろう。しかし記者やディレクターの執念や気迫は以前に比べて、原稿用紙からは伝わりにくくなったよつな気がする。

乱筆乱文の部類に入ると自認している私は、この原稿もパソコンで書いていても、いつの日にか字体を整え、取材力を磨き、表現力を鍛えたのちに、まささらな紙の上で自由にペンを走らせてみたい。そうなったとき、編集者からの評価も少しは上がるのでは、と願っている。

Let's think together! 地球温暖化を防ぐ私たちの小さな一歩

一人の力は小さくともチームで取り組みればいつかきっと。

地球温暖化防止に向けて、様々な努力が続けられています。私ども製紙産業を含めた産業界でも、自主的な取組みが行なわれ、着実な成果を挙げつつあります。しかし、より実効あるものにするためには、産業界のみならず、運輸部門や家庭を含んだ民生部門での取組みが欠かせません。



6%」をご存知ですか。冷暖房温度の調節、電気や水の使い方等、身近なところから取り組み、大きな削減効果を生み出すという、一人ひとりのアクションプランです。地球規模の問題に対して、一人の力はそれほど大きくないかも知れませんが、チームの力を信じて、一人ひとりがまずできることから行動に移していく。それが、豊かな地球を次の世代に残していく道だと私たちも考えます。

温室効果ガスの排出量を6%削減するという、日本の目標を実現するための国民的プロジェクト「チーム・マイナス

家庭で、オフィスで、若紙リサイクルの輪、広げよう！



今回は11月3日号、つかこうへいさんです。

提供 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>